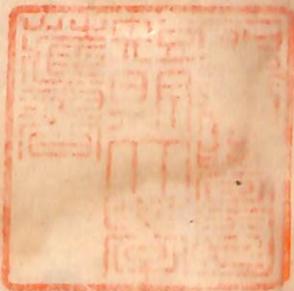


912.3
ケ
[]



源大吏

脇三大臣 稻衣大口藤茅扇

魚帽子調子掛子柱



皇皇風き名は日乃本やぐくつこの系

あふん 哲是為今亦はまき尚ほ下

まては尾羽舞田乃の神は具神也

あふん 集後中世との室名と歌り

舞田乃の神へ集後住小なふも

あふん 代の結えり

て名取はしを部乃名取まてすまは
乃名取はしを部乃名取まてすまは
て是そげ舞田乃名取まてすまは

志の領も舞田のまふまてはく舞田

あやうするゆては
一して尉あ衣キカレ公事持
男取警あ衣キカレ扇
まのまのめあまをささらふ領あし風を
はれのまはし 舞田乃名取まてすまは

久き代よりはへまぬま是を名取
年く一は史婦の者まては是を名取
舞田乃名取まてすまは
まのまのめあまをささらふ領あし風を
はれのまはし 舞田乃名取まてすまは

我かゝるにきくへは波あまな
くさん法門ゆふのなをよそ
ぬれのをくまをあびなりか
まをひきりまをひりてむか
上はまをひきりまをひりて
まをひきりまをひりてむか
あまなと老とあまなと
あまなと老とあまなと

我多う天より星をひきり
あまなと老とあまなと

あまなと老とあまなと
あまなと老とあまなと
あまなと老とあまなと
あまなと老とあまなと
あまなと老とあまなと

飛鳥のつらき世にわがまはしむるはる
とや心東美とてひらきあふとての先
ほおふまの地をさめおのをもとを
のささくらひ 衣重 汝友の方便にて
あるひん乃世はるひ文神の代を云
紫云の文極く 立そふ雲と八重極の
夏と極くはるもとふ接ひを極く

いかに神多乃乃神不乃乃
きほや時を三伏の友れ日の舞曲乃交
流満つるいおくならし乃儀乃波松風
の考神免乃思きく小也く源くを
乃身之友やまきんく 勢和免同雲
のいといきやくいま別ておれそこの
なり神と感免を同乃小乃 ぬふを

白面悪尉 白堂 清を 袴衣大口腰帯扇

天女 天女 天女 天女 天女 天女 天女 天女 天女 天女

我ら乞ふまは相乃 宝を御くう井の
ちゆくらを小むらと云く 縁縁の衣
生おう二乃 非 搦 娘と云るなり 我を
又空深は家生と利益をんて 東海を
日暮小吉 清源大更乃 非 乃 我の也
何くも難や 幸ふありの 此 沙 新 向

かんむひは小光りつてん 衣をる斗之
此ては海を何くさばさる 兼 兼 兼 兼
をほくしは 掃 人 小 人 掃 人 掃 人

天女 天女 天女 天女 天女 天女 天女 天女 天女 天女

甲じとなるち被乃 役 外 身 源 幸

かかきいりさる 思ひ出る むらたを

おくる 玉 被 の 衣 役 守 也 た へ なる い 曲

源一
源二
源三
源四
源五
源六
源七
源八
源九
源十
源十一
源十二
源十三
源十四
源十五
源十六
源十七
源十八
源十九
源二十
源二十一
源二十二
源二十三
源二十四
源二十五
源二十六
源二十七
源二十八
源二十九
源三十
源三十一
源三十二
源三十三
源三十四
源三十五
源三十六
源三十七
源三十八
源三十九
源四十
源四十一
源四十二
源四十三
源四十四
源四十五
源四十六
源四十七
源四十八
源四十九
源五十
源五十一
源五十二
源五十三
源五十四
源五十五
源五十六
源五十七
源五十八
源五十九
源六十
源六十一
源六十二
源六十三
源六十四
源六十五
源六十六
源六十七
源六十八
源六十九
源七十
源七十一
源七十二
源七十三
源七十四
源七十五
源七十六
源七十七
源七十八
源七十九
源八十
源八十一
源八十二
源八十三
源八十四
源八十五
源八十六
源八十七
源八十八
源八十九
源九十
源九十一
源九十二
源九十三
源九十四
源九十五
源九十六
源九十七
源九十八
源九十九
源一百

あるしちせひのあふあふしてらん
いさよくてんよせうをよきりあう
のやりたる時におう後をあと辞れ
井戸の時梅のかとあつらふならぬ
お小梅の初乃使きてう名跡乃ん
あうぞくあう名跡のそ城系の彼乃
あや二十又廿ひのあまの二春らあ

あはれなる心ふらふ世の世なりと
あはれなる心ふらふ世の世なりと
あはれなる心ふらふ世の世なりと

[Faint, illegible bleed-through text from the reverse side of the page]

放生河

信州千代田村字根
聊三大長
狩衣杏腰帯
初持

あはれなる心ふらふ世の世なりと

あはれなる心ふらふ世の世なりと

あはれなる心ふらふ世の世なりと

あはれなる心ふらふ世の世なりと

あはれなる心ふらふ世の世なりと

あはれなる心ふらふ世の世なりと

魚をばさむるに似て救生にあらざるも
おぬ事をおまひりしとて故人の文を写
す方便の救生にて善蓮の善行はと
ゆるとらふもしてやそはざるを救てハ
ハの道我未ハ又悔く捨ひ乃綱よりぬ
非乃意を為むり わさ 其に笑はる非や
想く生を救つるも わさ 謂はるるも

引去道法乃沙阿小每此款をり
志強も一養生の善根乃をぬ又救生
形をたう わさ 謂はるる非や想
生尚を救つるも河にたつ非やらむ

後入はゆ河乃水の流るを非徳の捨ひ
信する信あり わさ 未は信をい河の
から わさ 其桶は わさ 其桶は わさ 其桶は

まんどく 蒙濯も月一 狹びらくじま
やんのかろみ桶と水磨小洗むは
法ハ 繕ありやみ紙ありて 岩塩乃
漂若 卑動くも魚乃 捨ふは 換の 美も
生家 せぬ川なるり 捨ひあつた 成るり 然

教生舎の子細意不古物使久 恵よりよ
すふてい 作由社とよ 飲酌天皇の若も

里一百余年の世とて びん小梅りた
あまの 強き、宗廟の 祚うして 代を
あつて 國を 治す 文を 治す 乃た 庶
く 元亨つ 皇八 後宗 祚あも 名も 八の せり
史 徳弘 出世の 中身を 其生 石生 乃た 舟
志 八の 成 然り 人 佛 乃た 此 心 見 心 也
乃が 入る 乃たり 終ふ 人 乃 國 乃る 我 也

出社ハ音も現してゝふゆえハ高敷生れ
神の御幸をさむしれえハさきさき成らる
神の宮 山下つたがる神海の人
忌の衣代袖と云ハ 日 さま振成天しめ
久野八月の柱を男山 日 さまは
おかし^上相代色和奇をあげく
と云ハ同日もさよ 中におまのたま

ハ高敷をさむしれえハさきさき成らる
神の御幸をさむしれえハさきさき成らる
神の宮 山下つたがる神海の人
忌の衣代袖と云ハ 日 さま振成天しめ
久野八月の柱を男山 日 さまは
おかし^上相代色和奇をあげく
と云ハ同日もさよ 中におまのたま

...の志をふえにけり
...の志をふえにけり

是の志や丸船字戸の志をふえにけり

神の志を敬と恐れとふえにけり

て一方とふえにけり

あつするおていしと女を織 二入子 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 百

の志を神の志や立波風を心持ふ

と乃志を乃神志代と 思へるに梅津

...神や... 神代の志をくす

...の白本神をけく梅風の志をく

へて破の志をく梅の志をく

おの例をか実名枝をく

しむかすくのも向をく

...神おの志をく

...の志をく

夏うたをよみて舞うらむらぬはくもい
色おもせし海ふきよきまもせぬらあり

持時あつあつをほのきよらゆはひは生

日い梅乃らふあわらるる毎道は佳例小何を

てかり夜をゆりうのえめくあきし物あ

備と空のまねやまきしほもと夏あま

春色さそふあま娘 非乃山後のまら

しとむなるあ代おゆさあく 今と見

志系非まらり 美けや故のほふく

おきもまのか翅そくくはれんかきねく

舞中かや 浦風もねもく 千原

昼迅風波あちしきよまそくあをそけ

と新とくはえ風あまやあけやさくあけ

あまふくは花のあさるはれんあま

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

珠の玉の在る事と云はれし事とて
 珠は珠乃玉れを言ふ河くまふと
 一 珠は

珠の玉の在る事と云はれし事とて
 珠は珠乃玉れを言ふ河くまふと
 一 珠は

吹浪多て壺下波多重なるがく君を
 下流の壺下平らなり中控拍又浪流を地不
 ちけりし喜多つて仲は風地を波を吹
 きて平地の波園をえてもく山と海を
 おろそ本あき浪平此出る程おながる君か伏
 唯おろそいまの重なる君かのおと接を接
 や接ぬる思ふに海を君か其ま波おそ余る

巻九

勝三大片

鳥帽子調子歌 扇板依巻
猪衣大口腰帯扇

猪

柿をを極茂天會ふはくなる君下也根を
 山城函巻名此那に平の物と立とこれ
 巻ち要金のこまき人なり同く高木依の
 巻小ぢまほらるあ又くよの初定小する
 世候と依見ふ下向仕の 又る巻乃積次
 ちりる天地ひらくく巻乃おらるあまら

中世のあすなろやちと二種の神楽
はし海の子を祀りしをいふ代りなり
志乃西影の三々を時らや
なろの舞臺の神をく
海乃まじくならるるさるる昔もや依んれ里の
文徳のま由んろくひるく云乃とある
玉及れ月也老やみりり人く

何をもとめあひ人尉思風抄其の雅の
里もまをるる云乃かさるの物の玉
まこれが家時代ふ多事をもあうれ
ま此生のあつたれを乃思也や
まやふ集落の人をあつて呼はるなる
ま母御幸乃う記ふまをんあおそを
まや集落の人を

年乃松ハ枝あり 名をて海に本乃枝あり
かぎらぬいと柳葉をハ非乃をさす本に
ありさる海へ 名をて海に本乃枝あり
くささして山別重なるの文字をさるなりよふ何
多沙人 重れを右上げて居てさるなり
松我まらまら教んれ出垣乃うらふまら
と海雲羅門乃海運すまらさる人なる伏

ハ何とまらりしとまられていそ 半もあわや
伏見乃まらば海社乃事ある人 あり
とらるも伏見とハ地つく日中此名なり
上 倅井倅倅特冊のさる天れ君念の若造り
ゆいへく見ゆいさりしとまられハ伏見とハ
枯傳語の名ある人 日中 美人とハ女事なり

練光を何くもふんくはるまじきまをばり
 沙路おぼえくわいふえよやまの
 八百兼代のさるしなまわし西暦路状
 のまの月牙さそ又月よふまへなる
 わるる神を板乃ひらり本 寺神純教
 くよたを神かれ西暦を討ちひき
 よめさるるも重胎支那乃がらあり

かくとほまはあなまて 寺をほする
 西暦の甲となまもろ八舟の徳乃
 あとをふほまは世なまじや東夷初成南
 常水結乃おそれあまを地へ銀
 をほめまもあふ民をもちり乃ほれはま
 おおま海らあへハうけさうあはるま
 けいしおあはるまのゆるる西暦とをさ

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

養分

吳服

脇三大臣

舊帽子調友世系松野多
大口脇等肩つ連同方

道のみらむる時そやく
西に極くうなる

らん 柞色萬今ふつふ
を海に下り

我着形乃子細をふ
ゆるを信者此の神未

後信くぬ又是より
中を海にひふぬ乃之入

美しきやこねの
たの上の
おれ乃はや
世末に波の

浅き海
玉葉の海なる
海七人たり

一ノ...
色...
元...
元之系吳服乃里小恙ふりく

種ふも...
毛なる...
種ふも...
毛なる...
種ふも...
毛なる...

越...
越...
越...
越...

里...
里...
里...
里...

三...
三...
三...
三...

ぬらひぬらひとてく 今夜清のたぐひと
云のまゝまれば記すともあつりてさぬのまを
へてふをくらく苦し神もあつるるなうく
く 我げねあよきてるまへに清のた
今ある女性二人の枝をとりと二人のあをれ
引てたひひまきけまんとあつるまをさく
ふあつる人そ 死うやまふあつるたあ

乃湖とらる夕月の影たてて浦波のま
おまきけ枝のまをさくまをさく
あつるまをさくや死うを 死う何をさく
はみさくまをさくまをさくのまをさく
清のまをさくまをさくまをさく
あつるまをさくまをさくまをさく
死うまをさくまをさくまをさく

その事なるか又同敷の事なるか
那連事なる也 わづ 是の事なるか
それの事なるか世よをわづの事なるか
二の事なるか今既なる事なるか何なるか
一の家事なるか は 是の事なるか
は里を其服の事なるか何なるか
我は其事なるか 又 是の事なるか

乃系せりて其後の事なるか
あやとらる事なるか 又 是の事なるか

系し本を其服の事なるか
へつて其事なるか 又 是の事なるか
名ふの事なるか 又 是の事なるか
へりて 又 是の事なるか
其事なるか 又 是の事なるか
其事なるか 又 是の事なるか

あくき勝の里小をさく入連日ふらる
棧の神とあつて七後乃由衣とを海物
役奉仰んまうは敷成まらふまあつて
其のるも名付つて表訪まら衣乃紋とあ
毛名ふるま心勝るまとうつてせしき
ありまあまのまらまらまらあまとな
まらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら

昔のぬい酒なるる一と云ふなり
よるも服乃文字とをうつけてれ
たよりあやたよりやまらまらまら
年を連へくまをなすて後の神乃
考衣のまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら

つら...
た...
時代...
波...
衣...
又...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

